

多様な言語材を活かした国語科指導の可能性について (3)

— 学習材研究の一環として「自ら作る」ことの意義 —

森田真吾

千葉大学教育学部

A Study of Various Language Products for Japanese Learning Materials (3)

MORITA Shingo

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿では、多様な言語材を活かした国語科指導の可能性について論じるために、学習材研究の一環として指導者が多様な言語材を「自ら作る」ことに注目し、その考えに基づいて実施している自身の大学での講義における取り組みを紹介し、その意義について検討を行った。大学での講義においては、受講生に多様な言語材を実際に作ってもらう機会を設けている。その制作過程の分析を行い、受講生の様々な気づきを整理した結果、多様な言語材を「自ら作る」ことを通して得られた気づきが、何気なく見落としがちなそれぞれの言語材の特性を明らかにし、自らの言語行為に対する自覚をも促すことにもつながり、さらにはそれがこれからの国語科指導の新たな可能性を拓く契機を与えうるということを指摘した。

キーワード：国語科指導 (Japanese language instruction) 多様な言語材 (various language products)
自ら作る (self-manufacturing) 教師教育 (teacher education)

1. はじめに

本稿では、多様な言語材を活かした国語科指導の可能性について論じるために、学習材研究の一環として指導者が多様な言語材を「自ら作る」ことに注目し、その考えに基づき実施している自身の大学での講義における取り組みを紹介し、その意義について検討を行う。

それに先立って、多様な言語材を活かした国語科指導の可能性について、筆者がこれまでに論じてきたことを以下にまとめておく。

まず、これからの国語科指導における学習材として重視されることになるであろう多様な言語材について考究を深める前提として、国語科指導における主要教材である教科書のあり方について検討を行った^{*1}。教科書は、これからも重要な学習材であり続けると思われるが、ただし、そのような位置づけであり続けるが故に、今後の国語科指導においても現場の教員に受動的な立場を強いてしまう可能性がある。学習材に対する能動的な態度を指導者に取ってもらうためにも、多様な言語材に目を向けることが重要であると論じた。

次に、先行実践において多様な言語材を活かそうとすることにどのような意義が認められようとしてきたのかについて検討を行った^{*2}。この検討を通して国語科指導における多様な言語材をめぐる価値観・学力観の二元論化を指摘し、それを解消するためには授業者・学習者の創意工夫を多様な言語材に加えながら学習材を造り上げていくことが必要であることを論じた。

以上をふまえつつ、さらに検討を加えるべきは、今後

における多様な言語材を活かした国語科指導について、具体的な実践に対する明確なビジョンを描いていくということになる。

そこで、本稿では国語科指導を実践するにあたって指導者が行う教材(学習材)研究の段階に焦点をあて、その段階において多様な言語材を「自ら作る」ことの重要性について論じることとする。

2. 多様な言語材を国語科指導に活かす際の留意点

今後、多様な言語材を活かした国語科指導を行うためには、生活の中に存在するどのような言語材を、教室の中(指導の文脈)に持ち込むことができるのか(あるいは持ち込むべきなのか)、それを見極めることが重要になってくる。

国語科指導で用いる教材を生活の中から見いだすことの意義について、野地潤家は次のように述べている。

生活即教材という考え方は国語学力の習得を生活を通して確かなものにしていくという国語教室における学習指導を支える。教科書教材のみに即する、狭く固定した教材観に立つかぎり、国語教室における学習指導を生き生きとしたものにしていくことはいたって難しい^{*3}。

学習者の言葉の学びを教室の中だけに留めておくといったことにならないようにするために、教科書以外の教材に対して積極的に目を向けていくことの必要性がここでは述べられている。ただし、ただ闇雲に生活の中から教材を見つけることはできないとして、野地は以下のように続けて述べている。

生活即教材とはいえ、子どもの日常生活の事象がそ

連絡先著者：森田真吾 s-morita@faculty.chiba-u.jp

のまま教材に化するのではない。指導によって、学習上、価値の高い教材が子どもの生活の中から発見され、選り出されて、教材としての機能を発揮するように工夫されるのである^{*4}。

この野地の指摘と照らし合わせて考えてみると、多様な言語材を国語科指導の中で用いるためには、まずは学習者を取り巻く日常生活の中から教材（学習材）足るべき言語材を選りださなければならない。それに加えて、選り出された言語材に対しては、それぞれの機能・特性に応じて、それを如何に授業に生かしていくことができるかという点に配慮することが必要であるということにもなる。ポイントは「選ぶこと」・「工夫すること」の2点ということになる。

「選ぶこと」ができるようにするためには、多様な言語材に対する評価眼を養うことが重要となる。

「工夫すること」は、ただ単に発達段階や年齢・指導目標などにあわせて言語材の扱いに軽重を付けるといった消極的な工夫の域に留まるのではない。実生活から選り出された言語材に対して内容の改編や新規の創出などが含まれた積極的なものまでもが含まれることになるであろう。

日常生活の中から選り出されたそれぞれの言語材の特性を生かしつつ、積極的に言語材に手を入れたり改編したりするようなことによってはじめて、国語科指導に対する目標・内容・方法に対する明確なビジョンが描けるようになる。

いずれにせよ、日常生活の中に数多く存在する多様な言語材を教材とするには、なんでもいいからそのまま教室に持ち込めばいいというわけにはいかないということになるが、こうした発想は国語教育研究なかでも広く共有されたものであると思われる。

桑原隆は、国語科指導における「教材化研究」の重要性について、「教材研究」と対置させる形で以下のように述べている。

教材研究は、既成の教材から出発する。教材が作品であれば、その作品研究を行い、授業の展開を案出していく。教材化研究は、既成の教材から固定的に出発するのではなく、教材を探すことから始まる。国語・言語に関する学問的成果や言語文化としての遺産を学びつつ、もう一方で児童・生徒の言語生活・言語活動・言語の学習構造や実態を見据えて、その両者の接点に、教材を発見し、教材を作り、学習（者）の論理を作り出していくことである^{*5}。

やはり桑原もそれぞれの言語材を漫然と取り上げて眺めてみるだけでは、特性や教材・学習材としての価値を見いだすことができないとしている。

それでは、日常における言語材に対する評価眼を養ったり指導に応じて工夫を凝らしたりして学習材を組織していくことのできる力を養うためにはどうすべきか。

それについて筆者は、そのための手立てとして、指導者がそれぞれの言語材の作り手の立場に立ち、既存の言語材を参考にしつつ、「実際に作ってみる」ことが重要であると考えている。

かつて西尾実氏は『国語国文の教育』（古今書院、昭和4年）のなかで次のように述べている。

作者が叙述することにおいて考え、叙述することにおいて見る働きを完成するごとく、読者はまた、主題・構想のみならず、その展開の極致としての叙述をも表現の立場から再構成作用として定位することによって、読む働きを完結する。しかして文学芸術が深く情意的基礎に立ちつつ、しかも知的作用を含むものであるのに応じて、読むことが芸術作用の基礎に立っての認識たるべき意義を獲得する^{*6}。

これは文学の鑑賞における主題・構想・叙述の扱いについての西尾の主張であるが、ここで指摘されている「表現の立場からの再構成作用」は文学作品の鑑賞のみならず、さまざまな言語材の表現意図や言語の特性への視野を明るくし、評価眼を養うことにつながっていくものと思われる。

そこで筆者は、以上の考えに基づき、学部において自身が担当している授業の中で、多様な言語材を受講生に実際に作ってもらうという活動に取り組むこととした。

3. 学部開設授業科目「国語科授業論Ⅲ」における取り組みについて

3-1. 「国語科授業論Ⅲ」について

自身が勤務する大学で行っている授業の一つに「国語科授業論Ⅲ」がある。この授業は教育学部中学校教員養成課程における専門科目「教科教育法」の中に位置づけられた選択科目である。毎年、受講生の数は50～60名ほどであり、中学校教員養成課程国語科教育分野の学生や、副専攻で中学・高校の国語の教員免許の取得をめざす小学校教員養成課程の学生、さらには文学部の学生が主に受講している。また、長期研修生の先生方も毎年聴講してくれている。

シラバスには授業概要ならびに目的・目標を次のように示してある。

【授業概要】

国語教育における教材・学習材の在り方について講義を行う。教材・学習材に関する研究上・実践上の成果をふまえ、これからの国語教育における教材・学習材を受講者自身がどう用意・組織すべきかなどについての理解を深める場とする。

【目的・目標】

国語教育における教材・学習材の在り方に対する知見を得ることによって、国語の教員としてふさわしい基本的能力を備えることをめざす。

1. 国語科指導における学習材選定の重要性に対する関心・意欲を高める。
2. 様々な学習材の国語科指導への活かし方を考えることができる。
3. 国語科指導に活かすことのできる様々な言語材について知ることができる。

このように、「国語科授業論Ⅲ」では、教材・学習材に関する研究上・実践上の成果をふまえ、これからの国語教育における教材・学習材のあり方に対する受講者の

理解を深めることを目的としている。

それにより、こちらが一方的に講義するという形式ではなく、受講生が自らの活動を通して自身の考えを深められるよう、授業内容を組織するようにしている。

3-2. ワーク「つくる」活動の概要

この授業の中で受講生に行ってもらっているのが「ワーク『つくる』」である*7。

大まかな活動の流れは次の通りである。

- ① ワークの趣旨説明・取り組むべき課題の選定・作業計画の立案 (1時間目)
- ② 各種言語材の制作 (2・3時間目)
- ③ グループに分かれ、完成したそれぞれの作品を紹介しあい、指導提案の内容を練る (4時間目)
- ④ グループ発表・受講生同士の意見交換 (5時間目～)

日常生活のなかに存在する言語材をどのように国語科指導に活かすべきかを考えるために、受講生にいろいろな言語材を実際に作ってもらい、その経験に基づいて国語の授業についての提案をしてもらうというのが基本的な活動の流れになっている。

それぞれの時間における具体的な取り組みの様子は以下のとおりである。

【1時間目】

—取り組むべき課題の選定・作業計画の立案—

このワークに入るまでの授業の中で、受講生にはこれまでの国語科指導における学習材の考え方を踏まえたくて、多様な言語材への注目が高まっていることについて説明を行っている。

1時間目は、受講生それぞれが取り組む課題の選定と作業計画の立案を行う。作業の流れや制作する言語材に対する具体的なイメージを固めてもらうことがねらいとなっている。

まずは以下の内容を記した課題プリントを受講生に配布するところから活動は始められる。

〈課題プリントの内容〉

ワーク「つくる」

より本物に近い 実用性を志向した 各種言語材を自分で作ってみましょう

【課題一覧】

- A. 説明書 … 子ども向けの電化製品の説明書作って下さい
- B. ポップ … 自分が理想とする本屋さんの本棚をイメージし、そこに配置する5枚のポップを作成して下さい
- C. 本の帯 … 新しいコンセプトで、従来とは異なる一風変わった本の帯を作成して下さい (3バージョン)

- D. パンフレット … まだ映画化されていない (が、映画にしたい) 小説・物語の映画パンフレットを作成して下さい
- E. レストランのメニュー … あなたがシェフです
- F. 日めくりカレンダー … 古今東西の「名言」を採り入れた日めくりカレンダーを作して下さい
- G. 新聞 … レイアウトを忠実に再現し、記事内容を「自分」に差し替えた紙面 (1ページ) を作成して下さい
- H. 折り込みチラシ … ターゲットを明確にしてスーパーの折り込みチラシを作成して下さい

受講生たちは、多様な言語材への注目が高まっているということ、講義で聞いて一応は理解してくれているように感じる。しかし、それだけでは理解が抽象的で漠然としたものに留まったままになってしまう。だからこそ、その理解を実感の伴ったものに転化させるために実際に手を動かしてもらうのである。

課題を目にした受講生の反応は様々であるが、概ね好意的に受け入れてくれているようである。自分なら何が作れそうか、何を作りたいかといったことをそれぞれ考えている様子である。

言語材の選択にあたっては、国語科の授業の中にすでに多く取り入れられているものだけでなく、あまり国語科の指導の中で扱われることのないレストランのメニューなども課題に含めている。

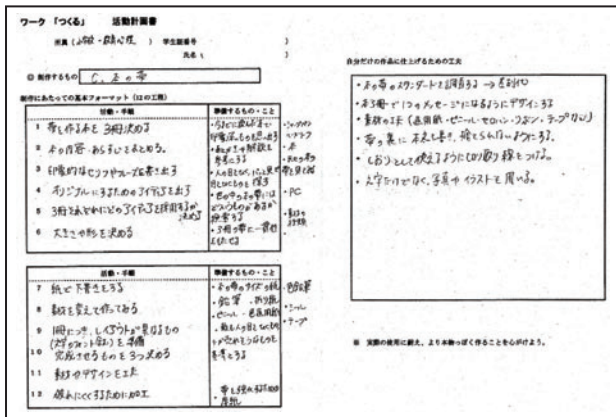
新聞や帯・ポップなどは国語科の授業に多く取り入れられるようになっているが、このワークではこれからの国語科指導の新しい方向性を打ち出すことができるようにするために、本の帯ならば「新しいコンセプト」で、新聞ならば「自分のことを話題にして紙面を作り直す」といった風に、すこしずつアレンジを加えて言語材を制作できるような課題を設定するようにしている。

その後、受講生を5～6名のグループに分け、グループごとに制作する言語材を決定する。受講生それぞれの希望を優先することも考えたが、作品を作り上げるだけでなく、それに基づく指導提案・協議と続いていくので、グループの人数のばらつきをなくすためにこちらで適宜割り振りを行うことにしている。

ただし、分担を決めた後、いきなり作ろうと指示を出すだけでは、当然ではあるが作業に取りかかることができない。自らの制作すべき言語材に対する何らかの見通しを持たせる手立てが必要になってくる。

そこで、まずは前年度までの授業の中で過去の受講生たちが制作した言語材の存在を知ってもらうことにしている。過去の受講生の作品は、基本的に写真に撮って記録をすべて残しているの、それらをまずは見てもらうのである。見ることによって、自分が制作すべき言語材に対する具体的なイメージを持てるようになってくるとともに、完成度の高い完璧なものを作らなければならないといった心的負担も軽くしているようである。

本時において次に行くことは、制作活動そのものに対する活動の見通しの明確化である。これから自分がつくろうと思っている作品の完成イメージを持ちつつ、それを完成させるために必要な手順を12個に分けてワークシートに記入するのである。



【作業計画をまとめるためのワークシート】

こうした計画表を作ることに慣れていない大半の受講生は、活動の早い段階でいきなり作業に入ろうとしてしまう。ここで意識して指導しているのが、既成の言語材を参考にすることの重要性についてである。いずれの言語材を制作することになったとしても、自分の考えだけでできることには限界があることを説明し、まずは既成の言語材を収集・分析するという手順を必ず加えさせるようにしている。今、我々が目にしていく言語材は、どのような目的で作られているのか、そこにどんな言葉が用いられようとしているのか、目的に応じた工夫にはどのようなものが見られるかなどを押さえた上で、それをベースにして自分の作品作りへとつなげるようにしている。

【2～3時間目】

—言語材の制作活動—

2時間目と3時間目は受講生それぞれが個別に作業を進める時間である。

前時に作成した作業計画にあわせて、各自が素材や道具を持参しているので、それをいながら活動を行うことにしている。

個別の作業のために授業時間を2時間すべて充てることについては、受講生が活発に作業してくれるのかといった点など不安がなかったわけではない。準備が足りず、1時間なにもせず過ごす学生が出てきやしないかと心配もした。しかし実際に活動させてみるとほとんどの受講生が積極的にそれぞれの課題に取り組む様子がみられる。

たとえば、

- ・本を一心不乱に読みふけったり、モデルとなる既成の言語材を読み込む姿
- ・色画用紙をハサミで切ったり貼ったりする姿
- ・持参したノートパソコンの画面をにらみながら文章を練り上げようと努力する姿
- ・自分のアイデアを懸命に周囲の友人たちに伝えようと話をする姿

など、それぞれが自らの課題意識に基づいてそれぞれの活動を行っている。ある程度まとまった時間、自分と向き合うことを通して、自分の性行や興味・関心の所在に目を向けたり、自らの言語生活に対する内省を行ったりしているようである。

2時間の作業時間で終わらなかった受講生には次の時間までに仕上げてくるよう指示を出し、授業を終える。

【4時間目】

—グループ内で作品紹介・指導提案の練り上げ—

4時間目では、完成したそれぞれの作品をグループで紹介し合い、感想交流を行う。そしてグループで制作過程を振り返りつつ、それぞれの言語材の特性・作るために必要な言葉の力などを整理し、それらに基づいて指導提案を行ってもらうことにしている。

前時までは、それぞれが個別に作業を行っているため、他の受講生の制作した言語材をじっくりと見るのはこの時間が初めてということになる。自分の作った作品にはない工夫が他の受講生の作品に多く見られるようで、活発な意見交換が行われている。詳しくは後で述べることにするが、ここにおける受講生同士の工夫点の気づきが、それぞれの言語材の特性を考えることにもつながっていくことになる。

また、この授業は長期研修生として大学にやってくる小・中学校の現職の先生方も多く聴講してくれている。本時における指導提案についての協議には長研生の先生方にもそれぞれのグループに加わってもらうことにしている。

自分たちの考えた指導提案の妥当性について意見をいただいたり、国語科の学習指導案を作成する際のポイントや授業の実際についてさまざまな話を聞くことができる、学部生にとってよい学びの機会となっている。

発表内容は、それぞれの言語材について「1. 特性」「2. 制作に必要な言葉の力」「3. 指導提案」の三観点に基づいてまとめてもらい、各グループにレジュメを作成してもらい、発表の準備を進めてもらっている。

学部の他の講義等で、学習指導案の分析や模擬授業を経験している学生も多いが、他者と協働して国語科学習指導案を作ってみるということはほとんど行っていない。そのような点からしても、グループで指導提案を練り上げるというのは受講生にとって貴重な経験となっているように思われる。

【5時間目～】

—グループ発表・受講生同士の意見交換—

5時間目以降は、それぞれのグループが考えた指導提案を発表してもらい、その内容をめぐって意見交換を行う時間としている。

発表から意見交換までの流れは次の通りである。

まずその時間に発表を担当することになったグループの受講生は、実物投影機を用い、それぞれが制作した言語材の紹介を（工夫した点や作るにあたって困難だった点なども合わせて）一人一人行う。

そのあと、言語材の特性・制作に必要な言葉の力・指導提案を発表する。

発表後は質疑応答をおこなう。言語材の特性や制作に必要な言葉の力の認め方に対する妥当性や、提案に対する指導効果や指導可能性をめぐって活発な意見交換が毎回繰り返されることになる。

そして、質疑応答終了後、全体を通してのまとめを簡単にこちらでおこない、コメントシートを配布する。発表したグループの受講生には「発表後の感想」を書いてもらい、発表を聞いた受講生には「発表内容についての感想や意見」を発表者に向けて書いてもらうことにしている。このコメントについては、回収してこちらで確認が済んだ後、コピーして発表者全員に配布し、発表に対する感想をフィードバックするようにしている。

4. 「自ら作る」ことによって得られた受講生の「気づき」について

ワーク「つくる」によって「国語科授業論Ⅲ」の受講生は、自分の力でそれぞれの作品を完成させ、その成果をグループ内で共有し、授業提案と結びつけながら他グループの受講生と意見交換を行う。

その過程において受講生は、多様な言語材やそれを取り巻く言語環境や自身の言語生活などについて、非常に多くの気づきを得ることになる。

ここではそうした受講生の気づきにはどのようなものがあるのかということに焦点を当て、その意義について考察を加えることとする。多様な言語材を実際に作ってみることによって得られる受講生の気づきは実に様々であるが、それらは大きく二つに分けて整理することができる。

4-1. 既成の言語材の特性・自らの言語行為の再評価

まず一つ目の気づきは、日々の生活の中で何気なく見落としている言語材の特性や、普段の生活の中でなんとなく行っている言語行為への自覚を促すことにつながる気づきとしてまとめることができる。

4-1-1. 「電化製品の子ども向け説明書」をめぐって

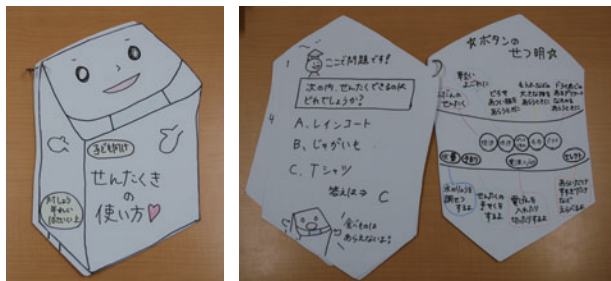
ワーク「つくる」の課題のなかに「子ども向けの電化製品の説明書を作ろう」というものがある。

この課題は、既成の（大人向けの）説明書を子ども向けに分かりやすく作りかえるというものであるが、これに取り組むことになったグループの受講生たちは、子どもたちにとっての「わかりやすさ」とはどのようなものなのか、それぞれ試行錯誤しながら説明書を完成させるために努力することになる。その結果、できあがった説明書の中には子ども向けに分かりやすくするための様々な工夫を見いだすことができる。

たとえば、既成の説明書で使われている専門用語を易しく言い換えたり、難読漢字にルビをふるといったことが挙げられる。ただし、受講生の工夫はそのような表記上の工夫に留まるものではない。

分かりやすくすることが念頭に置かれ書き換えられた説明書には、クイズ形式で電化製品の使用についての理解を促そうとするものであったり、マンガやイラストを多用したりするものなども見られる。すなわち、単なる説明としてだけでなく、電化製品に対する使用方法など

の知識をいかに楽しく知ろうとしてももらえるかといった意欲喚起にまで踏み込んだ工夫も、受講生の作品の中に認めることができる。こうした工夫は、そもそも説明書を読もうと思ってもらえなければいくら分かりやすい内容をまとめてもあまり意味がないという発想に基づいているものと思われる。



【クイズ形式を取り入れた洗濯機の説明書】

また、子どもに対する「分かりやすさ」を実現するために、説明書の文言を簡潔に短くまとめるという手立てを取る受講生もグループの中には存在する。モデルとしている説明書の言葉を削ぎ落としながら、簡潔な内容にして作品を作り上げていくのである。

すると、それぞれの作品紹介やその後に続く話し合いの中で、受講生たちは、それぞれが作った作品の間に見られる「量的相違」に気を留めることになる。言葉を尽くして丁寧に説明することによって生じる「分かりやすさ」と、ポイントを絞って簡潔にまとめることで生じる「分かりやすさ」とがあるということになる。

既成の電化製品の説明書は微に入り細に入り丁寧に説明しているものが多い。膨大なページ数。圧倒的な情報量。中には読まずとも普通に使用することに何ら支障のない内容も含まれている。ならば、なぜそれは存在しているというのか？ それはもはや「分かりやすさ」という枠組みでは説明しきることのできるものではない。

こうして、受講生は既成の電化製品の説明書は、ただ単に機能などを分かりやすく説明するという役目を果たしているのみならず、不特定多数の相手を意識するが故の説明責任をその中で果たしているということに気づいていく。

4-1-2. 「名言集 日めくりカレンダー」をめぐって

「名言集 日めくりカレンダー」を制作することになったグループの受講生たちは、それぞれが「名言」と思う言葉を集め、取捨選択し、順番を考えてまとめ、1ヶ月分の日めくりカレンダーを制作することになっている。

何を「名言」とするかといった判断基準については各自で考えが異なっているが、いずれも実際に使用することを想定し、自分が好きな・元気になる言葉を集めてくるという点は共通している。実際に制作された日めくりカレンダーとしては、たとえば、次のようなものが挙げられる。

- ・スポーツ名言（実在のスポーツ選手やスポーツ漫画の登場人物たちの言葉を集めたもの）
- ・近代文学における文豪のことば（近代文学の作家を30名ほど取り上げ、代表作の中から自分の気に入った言葉やフレーズを集めたもの）

- ・誕生日名言（その月に生まれた有名人を1日から31日まで一人ずつ探し、それぞれの言葉を集めたもの）



【スポーツにまつわる名言 日めくりカレンダー】



【文学作品にまつわる名言 日めくりカレンダー】

作品を紹介し合い、自分の作品と他者の作品とを比較することで、この課題グループの受講生たちは、次第に名言集作りにおける言葉（名言）の収集方法の異なりというものに気を留めるようになる。

名言集を作るためには何かしらの方法でまずは言葉を集めなければならない。

その集め方は大きく以下の二つに分かれる。

- ・インターネットを使ってピンポイントで自分の知りたい名言を集めるという方法
- ・これまでの読書経験などに基づく「蓄積」から名言を集めるという方法。

どちらの方法がよいかといった点については、ここではあまり問題ではない。大切なのは、何気なく（無自覚に）行った自らの言語行為が他者のそれを知ることによって相対化されるという点にある。

この場合は、多様な言語材を自ら作ることによって、自らの言語行為に対する気づきをも得ていると捉えることができる。

4-2. 言葉の新たな可能性に関する気づき

多様な言語材を自ら作ることによって得られる気づきの二つ目は、今後における言語生活やことばの学びの可能性を拓いていくことに関するものである。

受講生によって制作される言語材は、忠実に既成の言語材の様式・スタイルを踏襲して作られるものばかりではない。さまざまなアイデア・斬新な発想が盛り込まれ、

アレンジが加えられたり、全く新しいものが作り出されたりしている。現在においては実在はしないが、実在していてもなんらおかしくないと思わせるようなものもこの活動から生み出されている。

そういったものを作り上げることによって、新しい世界・価値が言葉によって生み出される可能性というものを気づくことができるのである。

4-2-1. 「レストランのメニュー」を作る

たとえば架空のレストランのシェフとなり、その店のメニューを制作することになった受講生たちは、自分の置かれている立場や境遇などはいったん脇に置いて、シェフになりきり、お店のコンセプトや料理などについて具体的なイメージを明確にしたうえでメニューを作り上げる。

その一例としては、以下のようなものが挙げられる。

- ・本好きのためのブックレストランのメニュー
- ・自分が生まれた土地の郷土料理店のメニュー
- ・空港内にある外国人旅行者向けの寿司店のメニュー



【オリジナル料理のレストランのメニュー】

「本好きのためのブックレストランのメニュー」とは、物語や小説の中で印象的に登場する料理をそのままメニューにしたものである。「外国人旅行者向けのお寿司屋さんメニュー」は、外国人にも分かりやすい寿司のネタの説明や日本文化の紹介をも取り入れてメニューとしている。

このように架空の飲食店をイメージし、そこで使われるメニューを制作するにあたっては、様々な言葉の力が発動される。

たとえば、

- ・さまざまな料理の名付けに関する言葉の組み合わせや造語に関する力
 - ・料理の特徴を隈なく説明するための描写力
 - ・既存の語彙知識を総動員して料理のおいしさを表す形容表現に関する力
 - ・メニューに示された料理を「食べてみたい」と思わせるためのレトリックやキャッチコピーに関する力
- など、受講生たちは、架空の場であるからこそその自由な雰囲気から安心して虚構世界のなかで言語活動を行っている。そして実はそのような取り組みの中からこそ、新しいものが生み出されていく（言葉が世界を作り上げていく）可能性というものに気づくのである。

4-2-2. 新しいコンセプトで本の帯を作る

そのような可能性への気づきは、これまでの国語科指

導を見直す契機にもなり、新しい国語科指導への可能性を拓くことにつながっていく。それについては、「本の帯」に対する課題への受講生の取り組み状況を例にとって説明してみる。

この課題は、新しいコンセプトで今までに見たことのない本の帯を自分で考えて実際に作ってみるというものになっている。受講生は多くの本の帯を収集・分析し、そこにはないアイデアを見いだそうと努力する。その結果、様々なアイデアを盛り込んだ新しいスタイルの帯が受講生によって制作されている。

たとえば、次のようなものを挙げることができる。

- ・素材や形の新奇性にこだわった本の帯
（布で作った本の帯・穴の空いた本の帯など）
- ・付ける本のジャンルにこだわった本の帯
（旅行雑誌や参考書のための本の帯など）
- ・機能性にこだわった本の帯
（はがきとセットになっている本の帯・メモやしおりとして使える本の帯など）



【旅行雑誌のための本の帯】

書店で見かける一般的な本の帯というものは、不特定多数の読者に対し、購買意欲を喚起するため（実際に手にとってもらいたいがため）に存在しているといってもいいかもしれない。そのような本の帯は大量生産されている。

それに対してこの活動を通して作られる本の帯は、基本的にはこの世に一つしか存在しない。そのような帯を作るため、この課題を担当することになった受講生たちは、それぞれ自分で本を選び、今までにないものを作ろうと努力する。そうすることで次第に本の帯ならびに本そのものに対する愛着を高めていくことになるのである。

そうした愛着が、不特定多数の（他の誰かの）ための本の帯作りを、自分だけのかげがえのない一冊を創り出すことへと昇華させていく。そしてこのような発想に基づいて本の帯を作ることが、あらたな国語科指導（読書指導）の展開を生むことになるかもしれないのである。

実際に作ることによって、本当にその活動が学習者にとって意味ある活動となり得るかを吟味することが可能となる。「自ら作る」ことがこれからの国語科指導の可能性を大きく拓いていくことになるのである。

5. まとめ 今後の課題

本稿においては、多様な言語材を活かした国語科指導

について今後具体的な指導構想を行うために、まずは指導に先立つ学習材研究において指導者が多様な言語材を「自ら作る」ことの意義について検討を行った。自身が大学の授業のなかで行っているワークを取り上げ、多様な言語材を実際に作ることによる受講生の様々な気づきについてまとめることを通してそれを明らかにした。

受講生のアイデアは、総じて粗削りだが新鮮であり、一つとして同じ作品ができあがるということはけっして起こりえない。一人一人の創意工夫によって作品が作られ、それを周囲の人々と共有する楽しさ・充実感をも合わせて味わうことができたように感じる。

「自ら作る」ことによって得られた受講生の気づきは、何気なく見落としがちそれぞれの言語材の特性や自らの言語行為に対する自覚を促すのみならず、言語生活そのものならびにこれからの国語科指導の新たな可能性を拓くことにもつながっている。

最後に、ワーク「つくる」におけるグループ発表に対して書かれた受講生のコメントを以下にいくつか紹介しておきたい。

〈意見交換後の受講生のコメント〉

私は基本的に説明書を読まない人間ですが、困った時（例えば電源が付かない、変な音がする……）には説明書を開きます。説明書の後ろにある「困った時Q&A」などがとても役に立ちます。こういった「困った時」に注目した説明書もおもしろそうだと思います。（発表を）聞いていました。

普段本を選ぶ時に（書店の本棚にある）ポップを見て決めたりする事も多いけど、より細かい所に目を向けることはなかったし、まして教材としてみたこともなかった。なので、今度から本屋に行った時は新しい視点からポップを見るように意識してみたいと思いました。

レストランのメニューは小さい頃から身近に触れてきたものであるが、そのようなメニューについてこれほど深く考えたのは初めてだった。しかしメニューについてよく考えてみると、レストランの雰囲気やコンセプトを表現する工夫が盛り込まれていたり耐久性への配慮があったり、商業的な目的があったりして、メニューは非常に深いものであると思った。

一つの映像をさまざまな観点からまとめ直すことができるというところが、映画のパンフレットのおもしろいところだと思いました。物語の本筋だけでなく、たとえばそれをキャストの立場（裏側）から見方を変えるとどんなコメントが書けるのかそのような想像力を創造力につなげる活動は、子どもたちに

とっても魅力のある学習となるのではないかと感じました。

自身の取り組みは、とりあえず試行的に受講生に活動してもらったにすぎないかもしれない。ただ少なくとも、この活動を行うことで、それぞれの学習材の特性に対する受講生の理解を深め、それらをあらためて日常生活の中でよく見直そうという姿勢を養うことはできたように感じている。

以上をふまえ、今後さらに究明すべきは、この学び・気づきを学習者の言葉の学びにつなげていくためにはどうすべきかという点である。それについては、具体的な指導構想のあり方とあわせ、稿を改めて論じることとする。

【注】

- * 1 森田真吾「多様な言語材を活かした国語科指導における可能性について（1）—国語教科書と多様な言語材との関係—」, 『千葉大学教育学部紀要』第62巻, 平成26. 3
- * 2 森田真吾「多様な言語材を活かした国語科指導における可能性について（2）—これまでの国語科指導における多様な言語材の位置づけ—」, 『千葉大学教育学部紀要』第63巻, 平成27. 3
- * 3 野地潤家『国語教材の探求』共文社, 昭和60, p.36
- * 4 野地潤家 前掲書 同頁
- * 5 桑原隆『言語生活者を育てる』東洋館出版社, 平成8, p.17
- * 6 西尾実『国語国文の教育』古今書院, 昭和4（引用は、『西尾実国語教育全集 第一巻』教育出版, 昭和49, p.111）
- * 7 ワーク「つくる」の取り組みは、これまで2010年度・2012年度・2014年度・2015年度開講の「国語科授業論Ⅲ」授業の中で実施してきた